



他の MTA との暗号化通信

この章は、次の項で構成されています。

- [他の MTA との暗号化通信の概要 \(1 ページ\)](#)
- [証明書の使用 \(2 ページ\)](#)
- [リスナー HAT の TLS の有効化 \(8 ページ\)](#)
- [配信時の TLS および証明書検証の有効化 \(11 ページ\)](#)
- [認証局のリストの管理 \(14 ページ\)](#)
- [HTTPS の証明書のイネーブル化 \(16 ページ\)](#)

他の MTA との暗号化通信の概要

エンタープライズゲートウェイ（またはメッセージ転送エージェント、つまり MTA）は通常、インターネット上で「素性が判別している相手」と通信します。つまり、通信は暗号化されません。場合によっては、悪意のあるエージェントが、送信者または受信者に知られることなく、この通信を傍受する可能性があります。通信は第三者によってモニタされる可能性や、変更される可能性さえあります。

Transport Layer Security (TLS) はセキュア ソケット レイヤ (SSL) テクノロジーを改良したバージョンです。これは、インターネット上での SMTP キャンバセーションの暗号化に広く使用されているメカニズムです。AsyncOS では SMTP への STARTTLS 拡張 (セキュアな SMTP over TLS) がサポートされます。詳細については、RFC 3207 を参照してください (これは、廃止になった RFC 2487 に代わるバージョンです)。

AsyncOS の TLS 実装では、暗号化によってプライバシーが確保されます。これによって、X.509 証明書および証明書認証サービスからの秘密キーをインポートしたり、アプライアンス上で使用する自己署名証明書を作成したりできます。AsyncOS では、パブリック リスナーおよびプライベート リスナーに対する個々の TLS 証明書、インターフェイス上のセキュア HTTP (HTTPS) 管理アクセス、LDAP インターフェイス、およびすべての発信 TLS 接続がサポートされます。

TLS を使用した SMTP カンバセーションの暗号化方法

TLS を使用した SMTP カンバセーションの暗号化方法

	操作内容	詳細
ステップ 1	公認の認証局からの X.509 証明書と秘密キーを取得します。	証明書の使用 (2 ページ)
ステップ 2	E メールセキュリティ アプライアンスに証明書をインストールします。	次のいずれかで証明書をインストールします。 <ul style="list-style-type: none"> • 自己署名証明書の作成 (4 ページ) • 証明書のインポート (7 ページ)
ステップ 3 :	メッセージ受信用、またはメッセージ配信用、またはその両方の TLS をイネーブルにします。	<ul style="list-style-type: none"> • リスナー HAT の TLS の有効化 (8 ページ) • 配信時の TLS および証明書検証の有効化 (11 ページ)
ステップ 4 :	(任意) リモート ドメインからの証明書を検証し、ドメインのクレデンシャルを確立するためにアプライアンスが使用する信頼できる認証局のリストをカスタマイズします。	認証局のリストの管理 (14 ページ)
ステップ 5 :	(任意) TLS 接続が必要なドメインにメッセージを送信できない場合に警告を送信するよう E メールセキュリティ アプライアンスを設定します。	要求された TLS 接続が失敗した場合のアラートの送信 (13 ページ)

証明書の使用

TLS を使用するには、E メールセキュリティ アプライアンスに対する受信および配信のための X.509 証明書および一致する秘密キーが必要です。SMTP での受信および配信の両方には同じ証明書を使用し、インターフェイス (LDAP インターフェイス) 上での HTTPS サービスや宛先ドメインへのすべての発信 TLS 接続には別の証明書を使用することも、それらのすべてに対して 1 つの証明書を使用することもできます。

certconfig を使用して証明書を設定した後で、Web インターフェイスの [ネットワーク (Network)] > [証明書 (Certificates)] ページおよび CLI の print コマンドを使用して証明書のリスト全体を表示できます。print コマンドでは中間証明書が表示されないことに注意してください。



注意 アプライアンスには TLS および HTTPS 機能がテスト済みであることを示すデモ証明書が同梱されますが、デモ証明書付きのサービスのいずれかをイネーブルにすることはセキュアではないため、通常の使用には推奨できません。デフォルトのデモ証明書が付属しているいずれかのサービスをイネーブルにすると、CLI に警告メッセージが表示されます。

署名付き証明書の導入

たとえば、マシンがドメインにないために E メール セキュリティ アプライアンスと他のマシン間で自己署名証明書を交換できない場合、署名付き証明書を使用します。企業のセキュリティ部門には、他にも要件が存在する場合があります。

	操作内容	詳細
ステップ 1	クラスタに導入する場合は、次の手順に従います。	証明書と集中管理 (4 ページ)
ステップ 2	自己署名証明書および証明書署名要求 (CSR) を生成します。	自己署名証明書の作成 (4 ページ)
ステップ 3:	生成された証明書を、署名のために既知の認証局に送信します。	認証局への証明書署名要求 (CSR) の送信について (5 ページ)
ステップ 4:	署名付き証明書をアップロードします。	認証局によって署名された証明書のアップロード (6 ページ)
ステップ 5:	証明書に署名した認証局が、信頼できる認証局のリストにあることを確認します。	認証局のリストの管理 (14 ページ)
ステップ 6:	該当する場合、中間証明書を使用します。	中間証明書 (4 ページ)

自己署名証明書の導入

自己署名証明書は一般に、企業のファイアウォールの背後にあるアプライアンス間の通信に使用できます。企業のセキュリティ部門には、他にも要件が存在する場合があります。

	操作内容	詳細 (More Info)
ステップ 1	クラスタに導入する場合は、次の手順に従います。	証明書と集中管理 (4 ページ)
ステップ 2	E メール セキュリティ アプライアンスから自己署名証明書を生成します。	自己署名証明書の作成 (4 ページ)

	操作内容	詳細 (More Info)
ステップ 3:	自己署名証明書をエクスポートします。	証明書のエクスポート (7 ページ)
ステップ 4:	自己署名証明書を、E メールセキュリティ アプライアンスと通信するマシンにインポートします。	他のマシンのマニュアルを参照してください。
ステップ 5:	他のマシンから自己署名証明書を生成し、エクスポートします。	他のマシンのマニュアルを参照してください。
ステップ 6:	自己署名証明書を別のマシンから E メールセキュリティ アプライアンスにインポートします。	証明書のインポート (7 ページ) または そのマシンとの通信の設定については、このマニュアルの章を参照してください。 たとえば、Cisco AMP Threat Grid アプライアンスとのセキュアな通信を構成するには、 オンプレミスのファイル分析サーバの設定 の詳細設定を構成する手順を参照してください。

証明書と集中管理

証明書は通常、証明書の共通名にローカルマシンのホスト名を使用します。E メールセキュリティ アプライアンスがクラスタの一部である場合は、クラスタレベルでインストールできるワイルドカードの証明書またはサブジェクト代替名 (SAN) の証明書を除いてマシンレベルとして各クラスタメンバの証明書をインポートする必要があります。メンバーのリスナーが別のマシンと通信するときにクラスタが参照できるように、各クラスタメンバの証明書は、同じ証明書の名前を使用する必要があります。

中間証明書

ルート証明書の検証に加えて、AsyncOS では、中間証明書の検証の使用もサポートされます。中間証明書とは信頼できるルート認証局によって発行された証明書であり、信頼の連鎖を効率的に作成することによって、追加の証明書を作成するために使用されます。たとえば、信頼できるルート認証局によって証明書を発行する権利が与えられた [godaddy.com](#) によって証明書が発行されたとします。[godaddy.com](#) によって発行された証明書では、信頼できるルート認証局の秘密キーと同様に [godaddy.com](#) の秘密キーが検証される必要があります。

自己署名証明書の作成

次のいずれかの理由により、アプライアンスで自己署名証明書を作成する可能性があります。

- 他の MTA との SMTP カンパセーションを TLS (着信と発信カンパセーションの両方) を使用して暗号化するため。

- HTTPS を使用して GUI にアクセスするためのアプライアンスの HTTPS サービスをイネーブルにするため。
- LDAP サーバがクライアント認証を要求した場合に LDAPS のクライアント証明書として使用するため。
- アプライアンスと Cisco AMP Threat Grid アプライアンスとのセキュアな通信を許可するため。
- アプライアンスと Cisco AMP Threat Grid アプライアンスとのセキュアな通信を許可するため。

CLI を使用して自己署名証明書を作成するには、`certconfig` コマンドを使用します。

ステップ 1 [ネットワーク (Network)] > [証明書 (Certificates)] を選択します。

ステップ 2 [証明書の追加 (Add Certificate)] をクリックします。

ステップ 3 [自己署名証明書の作成 (Create Self-Signed Certificate)] を選択します。

ステップ 4 自己署名証明書に、次の情報を入力します。

Common Name	完全修飾ドメイン名。
Organization	組織の正確な正式名称。
組織	組織の部署名。
市 (地名) (City (Locality))	組織の本拠地がある都市。
州/県 (State (Province))	組織の本拠地がある州、郡、または地方。
国 (Country)	組織の本拠地がある 2 文字の ISO 国名コード。
失効までの期間 (Duration before expiration)	証明書が期限切れになるまでの日数。
秘密キー サイズ (Private Key Size)	CSR 用に生成する秘密キーのサイズ。2048 ビットおよび 1024 ビットだけがサポートされます。

ステップ 5 [Next] をクリックします。

ステップ 6 証明書の名前を入力します。デフォルトでは、前に入力された共通名が割り当てられます。

ステップ 7 この証明書を証明書署名要求 (CSR) として送信するには、[証明書署名要求のダウンロード (Download Certificate Signing Request)] をクリックして CSR を PEM 形式でローカルまたはネットワーク マシンに保存します。

ステップ 8 変更を送信し、保存します。

認証局への証明書署名要求 (CSR) の送信について

認証局は、ID の検証および公開キーの配布に使用されるデジタル証明書を発行する第三者機関または企業です。これによって、有効で信頼できる身元によって証明書が発行されたことが

さらに保証されます。証明書および秘密キーは認識されている認証局から購入できます。シスコでは、サービスの重複を推奨しません。

E メールセキュリティ アプライアンスでは、自己署名証明書を作成して、公開証明書を取得するために認証局に送信する証明書署名要求 (CSR) を生成できます。認証局は、秘密キーによって署名された信頼できる公開証明書を返送します。Web インターフェイスの [ネットワーク (Network)] > [証明書 (Certificates)] ページまたは CLI の `certconfig` コマンドを使用して自己署名証明書を作成し、CSR を生成して、信頼できる公開証明書をインストールします。

初めて証明書を取得または作成する場合は、インターネットで「certificate authority services SSL Server Certificates (SSL サーバ証明書を提供している認証局)」を検索して、お客様の環境のニーズに最も適したサービスを選択してください。サービスの手順に従って、証明書を取得します。

次の作業

署名付き証明書の導入 (3 ページ) を参照してください。

認証局によって署名された証明書のアップロード

認証局から秘密キーで署名された信頼できる公開証明書が返されたら、証明書をアプライアンスにアップロードします。

パブリック リスナーまたはプライベート リスナー、IP インターフェイスの HTTPS サービス、LDAP インターフェイス、または宛先ドメインへのすべての発信 TLS 接続に証明書を使用できます。

ステップ 1 受信した信頼できる公開証明書が PEM 形式であるか、またはアプライアンスにアップロードする前に PEM を使用するように変換できる形式であることを確認します。(変換ツールは <http://www.openssl.org> の無料のソフトウェア OpenSSL に含まれています)。

ステップ 2 署名付き証明書をアプライアンスにアップロードします。

(注) 証明書を認証局からアップロードすると、既存の自己署名証明書が上書きされます。

- a) [ネットワーク (Network)] > [証明書 (Certificates)] を選択します。
- b) 署名のために認証局に送信した証明書の名前をクリックします。
- c) ローカルマシンまたはネットワーク ボリューム上のファイルへのパスを入力します。

ステップ 3 自己署名証明書に関連する中間証明書をアップロードすることもできます。

次のタスク

関連項目

- 署名付き証明書の導入 (3 ページ)

証明書のインポート

AsyncOS では、アプライアンスで使用するために、PKCS #12 形式で保存された証明書を他のマシンからインポートすることもできます。

CLI を使用して証明書をインポートするには、`certconfig` コマンドを使用します。



- (注) 署名付き証明書を導入する場合、この手順を使用して署名付き証明書をインポートしないでください。代わりに、[認証局によって署名された証明書のアップロード \(6 ページ\)](#) を参照してください。

ステップ 1 [ネットワーク (Network)] > [証明書 (Certificates)] を選択します。

ステップ 2 [証明書の追加 (Add Certificate)] をクリックします。

ステップ 3 [証明書のインポート (Import Certificate)] オプションを選択します。

ステップ 4 ネットワーク上またはローカルマシンの証明書ファイルへのパスを入力します。

ステップ 5 ファイルのパスフレーズを入力します。

ステップ 6 [次へ (Next)] をクリックして証明書の情報を表示します。

ステップ 7 証明書の名前を入力します。

AsyncOS のデフォルトでは、共通の名前が割り当てられます。

ステップ 8 変更を送信し、保存します。

次のタスク

- 自己署名証明書を導入する場合は、[自己署名証明書の導入 \(3 ページ\)](#) を参照してください。

証明書のエクスポート

AsyncOS では、証明書をエクスポートし、PKCS #12 形式で保存することも可能です。



- (注) 署名付き証明書を導入する場合、この手順を使用して証明書署名要求 (CSR) を生成しないでください。代わりに、[署名付き証明書の導入 \(3 ページ\)](#) を参照してください。

ステップ 1 [ネットワーク (Network)] > [証明書 (Certificates)] ページに移動します。

ステップ 2 [証明書のエクスポート (Export Certificate)] をクリックします。

ステップ 3 エクスポートする証明書を選択します。

ステップ 4 証明書のファイル名を入力します。

ステップ5 証明書ファイルのパスフレーズを入力して確認します。

ステップ6 [エクスポート (Export)] をクリックします。

ステップ7 ファイルをローカルマシンまたはネットワークマシンに保存します。

ステップ8 さらに証明書をエクスポートするか、または [キャンセル (Cancel)] をクリックして [ネットワーク (Network)] > [証明書 (Certificates)] ページに戻ります。

次のタスク

- 自己署名証明書を導入する場合は、[自己署名証明書の導入 \(3 ページ\)](#) を参照してください。

リスナー HAT の TLS の有効化

暗号化が必要なリスナーに対して TLS をイネーブルにする必要があります。インターネットに対するリスナー（つまり、パブリックリスナー）には TLS をイネーブルにしますが、内部システムのリスナー（つまり、プライベートリスナー）には必要ありません。また、すべてのリスナーに対して暗号化をイネーブルにすることもできます。

リスナーの TLS に次の設定を指定できます。

表 1: リスナーの TLS 設定

TLS 設定	意味
1. なし	TLS では着信接続を行えません。リスナーに対する接続では、暗号化された SMTP カンバセーションは必要ありません。これは、アプライアンス上で設定されるすべてのリスナーに対するデフォルト設定です。
2. Preferred	TLS で MTA からのリスナーへの着信接続が可能です。
3. 必須 (Required)	TLS で MTA からリスナーへの着信接続が可能です。また、STARTTLS コマンドを受信するまでアプライアンスは NOOP、EHLO、または QUIT 以外のすべてのコマンドに対してエラーメッセージで応答します。この動作は RFC 3207 によって指定されています。RFC 3207 では、Secure SMTP over Transport Layer Security の SMTP サービス拡張が規定されています。TLS が「必要」であることは、送信側で TLS の暗号化を行わない電子メールが、送信前にアプライアンスによって拒否されることを意味し、このため、暗号化されずにクリアテキストで転送されることが回避されます。

デフォルトでは、プライベートリスナーとパブリックリスナーのどちらも TLS 接続を許可しません。電子メールの着信（受信）または発信（送信）の TLS をイネーブルにするには、リスナーの HAT の TLS をイネーブルにする必要があります。また、プライベートリスナーおよ

パブリック リスナーのすべてのデフォルト メール フロー ポリシー設定で `tls` 設定が「off」になっています。

リスナーの作成時に、個々のパブリック リスナーに TLS 接続の専用の証明書を割り当てることができます。詳細については、[Web インターフェイスを使用してリスナーを作成することによる接続要求のリスニング](#)を参照してください。

GUI を使用したパブリックまたはプライベートのリスナーへの TLS 接続のための証明書の割り当て

ステップ 1 [ネットワーク (Network)]>[リスナー (Listeners)] ページに移動します。

ステップ 2 編集するリスナーの名前をクリックします。

ステップ 3 [証明書 (Certificate)] フィールドから、証明書を選択します。

ステップ 4 変更を送信し、保存します。

CLI を使用したパブリックまたはプライベートのリスナーへの TLS 接続のための証明書の割り当て

ステップ 1 `listenerconfig -> edit` コマンドを使用して、設定するリスナーを選択します。

ステップ 2 `certificate` コマンドを使用して、使用できる証明書を表示します。

ステップ 3 プロンプトが表示されたら、リスナーを割り当てる証明書を選択します。

ステップ 4 リスナーの設定が完了したら、`commit` コマンドを発行して、変更をイネーブルにします。

ログ

TLS が必要であるにもかかわらず、リスナーで使用できない場合は、E メールセキュリティ アプライアンスがメール ログ インスタンスに書き込みます。次の条件のいずれかを満たす場合、メール ログが更新されます。

- リスナーに対して TLS が「必須 (required) 」と設定されている。
- E メールセキュリティ アプライアンスは、「STARTTLS コマンドを最初に発行 (Must issue a STARTTLS command first) 」 コマンドを送信した。
- 正常な受信者が受信せずに接続が終了した。

TLS 接続が失敗した理由に関する情報がメール ログに記録されます。

GUI の例 : リスナーの HAT の TLS 設定の変更

-
- ステップ 1** [メール ポリシー (Mail Policies)]>[メール フロー ポリシー (Mail Flow Policies)] ページに移動します。
- ステップ 2** 変更するポリシーを持つリスナーを選択し、編集するポリシーの名前へのリンクをクリックします。(デフォルト ポリシー パラメータも編集可能)。
- ステップ 3** [暗号化と認証 (Encryption and Authentication)] セクションの [TLS:] フィールドで、リスナーに必要な TLS のレベルを選択します。
- ステップ 4** 変更の送信と保存
- 選択した TLS 設定が反映されてリスナーのメール フロー ポリシーが更新されます
-

CLI の例 : リスナーの HAT の TLS 設定の変更

-
- ステップ 1** `listenerconfig -> edit` コマンドを使用して、設定するリスナーを選択します。
- ステップ 2** リスナーのデフォルトの HAT 設定を編集するには、`hostaccess -> default` コマンドを使用します。
- ステップ 3** 次の質問が表示されたら、次の選択肢のいずれかを入力して TLS 設定を変更します。

```
Do you want to allow encrypted TLS connections?
```

1. No
2. Preferred
3. Required

```
[1]> 3
```

```
You have chosen to enable TLS. Please use the 'certconfig' command to ensure that there is a valid certificate configured.
```

- ステップ 4** この例では、リスナーで使用できる有効な証明書があるかどうかを確認するために `certconfig` コマンドを使用するかどうかを質問しています。証明書を作成していない場合、リスナーではアプライアンスにあらかじめインストールされているデモ証明書を使用します。テスト目的でデモ証明書で TLS をイネーブルにすることはできますが、セキュアではないため、通常の使用には推奨できません。リスナーに証明書を割り当てるには、`listenerconfig -> edit -> certificate` コマンドを使用します。TLS を設定すると、CLI でリスナーの概要に設定が反映されます。

```
Name: Inboundmail
```

```
Type: Public
```

```
Interface: PublicNet (192.168.2.1/24) TCP Port 25
```

```
Protocol: SMTP
```

```
Default Domain:
```

```
Max Concurrency: 1000 (TCP Queue: 50)
```

```
Domain map: disabled
```

```
TLS: Required
```

ステップ 5 変更をイネーブルにするには、`commit` コマンドを発行します

配信時の TLS および証明書検証の有効化

[送信先コントロール (Destination Controls)] ページまたは `destconfig` コマンドを使用すると、TLS をイネーブルにして、特定のドメインに電子メールを配信するように要求できます。

TLS だけでなく、ドメインのサーバ証明書の検証も要求できます。このドメイン証明書は、ドメインのクレデンシャルを確立するために使用されるデジタル証明書に基づいています。証明プロセスには次の 2 つの要件が含まれます。

- 信頼できる認証局 (CA) によって発行された証明書で終わる SMTP セッションの証明書発行者のチェーン。
- 受信マシンの DNS 名またはメッセージの宛先ドメインのいずれかと一致する証明書に表示された Common Name (CN) 。

または

メッセージの宛先ドメインが、証明書のサブジェクト代替名 (`subjectAltName`) の拡張の DNS 名のいずれかと一致している (RFC 2459 を参照)。この一致では、RFC 2818 のセクション 3.1 で説明されているワイルドカードがサポートされます。

信頼できる CA は、ID の検証および公開キーの配布に使用されるデジタル証明書を発行する、第三者機関または企業です。これによって、有効で信頼できる身元によって証明書が発行されたことがさらに保証されます。

エンベロープ暗号化の代わりに TLS 接続を介してドメインにメッセージを送信するように E メールセキュリティアプライアンスを設定できます。詳細については、「Cisco 電子メール暗号化」の章を参照してください。

すべての発信 TLS 接続に対してアプライアンスで使用する証明書を指定できます。証明書を指定するには、[送信先コントロール (Destination Controls)] ページの [グローバル設定の編集 (Edit Global Settings)] をクリックするか、または CLI で `destconfig -> setup` を使用します。証明書はドメインごとの設定ではなく、グローバル設定です。

[送信先コントロール (Destination Controls)] ページまたは `destconfig` コマンドを使用してドメインを含める場合、指定されたドメインの TLS に 5 つの異なる設定を指定できます。TLS のエンコードにドメインとの交換が必須であるか、または推奨されるかの指定に加えて、ドメインの検証が必要かどうかも指定できます。設定の説明については、次の表を参照してください。

表 2: 配信の TLS 設定

TLS 設定	意味
デフォルト	<p>デフォルトの TLS 設定では、リスナーからドメインの MTA への発信接続に [送信先コントロール (Destination Controls)] ページまたは <code>destconfig -> default</code> サブコマンドを使用するように設定されています。</p> <p>質問の "Do you wish to apply a specific TLS setting for this domain?" に対して "no" と回答すると、値の "Default" が設定されます。</p>
1.なし	インターフェイスからドメインの MTA への発信接続には、TLS がネゴシエートされません。
2.Preferred	E メールセキュリティ アプライアンス インターフェイスからドメインの MTA に対して TLS がネゴシエートされます。ただし、(220 応答を受信する前に) TLS ネゴシエーションに失敗すると、SMTP トランザクションは「クリアな」(暗号化されない) ままです。証明書が信頼できる認証局によって発行された場合、検証は行われません。220 応答を受信した後にエラーが発生した場合、SMTP トランザクションはクリア テキストにフォールバックされません。
3.必須 (Required)	E メールセキュリティ アプライアンス インターフェイスからドメインの MTA に対して TLS がネゴシエートされます。ドメインの証明書の検証は行われません。ネゴシエーションに失敗すると、電子メールはその接続を介して送信されません。ネゴシエーションに成功すると、暗号化されたセッションを経由して電子メールが配信されます。
4.Preferred (Verify)	<p>E メールセキュリティ アプライアンスからドメインの MTA への TLS がネゴシエートされます。アプライアンスはドメインの証明書の検証を試行します。次の 3 つの結果が考えられます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • TLS がネゴシエートされ、証明書が検証される。暗号化されたセッションによってメールが配信される。 • TLS がネゴシエートされるものの、証明書は検証されない。暗号化されたセッションによってメールが配信される。 • TLS 接続が確立されず、証明書は検証されない。電子メール メッセージがプレーン テキストで配信される。
5.Required (Verify)	<p>アプライアンスからドメインの MTA への TLS がネゴシエートされます。ドメインの証明書の検証が必要です。次の結果が考えられます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • TLS 接続がネゴシエートされ、証明書が検証される。暗号化されたセッションによって電子メール メッセージが配信される。 • TLS 接続がネゴシエートされるが、信頼できる認証局 (CA) によって証明書が検証されない。メールは配信されない。 • TLS 接続がネゴシエートされない。メールは配信されない。

TLS 設定	意味
6. 必須 - ホステッドドメインの検証	<p>[必要な TLS (TLS Required)]、[検証と必要な TLS (Verify and TLS Required)]、[ホステッドドメインの検証 (Verify Hosted Domain)] の各オプションは、ID 検証プロセスに相違があります。提示される ID を処理する方法および使用が許可される参照識別子の種類によって、最終的な結果に相違が生じます。</p> <p>提示される ID は、最初に <code>dnsName</code> タイプの <code>subjectAltName</code> 拡張から派生します。<code>dnsName</code> と、承認された参照識別子 (REF-ID) のいずれかが一致しない場合、CN が件名フィールドに存在し、さらなる ID 検証に合格するかどうかに関係なく、検証は失敗します。件名フィールドから派生した CN は、証明書に <code>dnsName</code> タイプの <code>subjectAltName</code> 拡張が含まれない場合のみ検証されます。</p>

グッドネイバーテーブルに指定された受信者ドメインの指定されたエントリがない場合、または指定されたエントリが存在するものの、そのエントリに対して指定された TLS 設定が存在しない場合、[送信先コントロール (Destination Controls)] ページまたは `destconfig -> default` サブコマンド ("No"、"Preferred"、"Required"、"Preferred (Verify)"、または "Required (Verify)") を使用して動作を設定する必要があります。

要求された TLS 接続が失敗した場合のアラートの送信

TLS 接続が必要なドメインにメッセージを配信する際に TLS ネゴシエーションが失敗した場合、E メールセキュリティ アプライアンスがアラートを送信するかどうかを指定できます。アラートメッセージには失敗した TLS ネゴシエーションの宛先ドメイン名が含まれます。E メールセキュリティ アプライアンスは、システムアラートのタイプの警告重大度レベルアラートを受信するよう設定されたすべての受信者にアラートメッセージを送信します。GUI の [システム管理 (System Administration)] > [アラート (Alerts)] ページ (または CLI の `alertconfig` コマンド) を使用してアラートの受信者を管理できます。

TLS 接続アラートの有効化

-
- ステップ 1** メールポリシーの [送信先コントロール (Destination Controls)] ページに移動します。
 - ステップ 2** [グローバル設定を編集 (Edit Global Settings)] をクリックします。
 - ステップ 3** [必要な TLS 接続に失敗した場合にアラートを送信： (Send an alert when a required TLS connection fails:)] の [有効 (Enable)] をクリックします。
- これは、ドメイン単位ではなく、グローバルな設定です。アプライアンスが配信を試行したメッセージの情報については、[モニタ (Monitor)] > [メッセージトラッキング (Message Tracking)] ページまたはメールログを使用します。
- ステップ 4** 変更を送信し、保存します。
-

次のタスク

これはコマンドライン インターフェイスでも構成できます。CLI で `destconfig -> setup` コマンドを使用して TLS 接続アラートを有効化します。

ログ

ドメインに TLS が必要であるにもかかわらず、使用できない場合は、E メールセキュリティ アプライアンスがメール ログ インスタンスに書き込みます。TLS 接続を使用できなかった理由も記載されています。次の条件のいずれかを満たす場合、メール ログが更新されます。

- リモート MTA で ESMTP がサポートされない（たとえば、E メールセキュリティ アプライアンスからの EHLO コマンドが理解できない）。
- リモート MTA で ESMTP がサポートされるものの、「STARTTLS」が EHLO 応答でアドバタイズされる拡張のリストにない。
- リモート MTA で「STARTTLS」拡張がアドバタイズされたものの、E メールセキュリティ アプライアンスで STARTTLS コマンドを送信した際にエラーが返される。

認証局のリストの管理

アプライアンスは、リモートドメインからの証明書の検証にはドメインのクレデンシャルを確立するために使用する保存された信頼できる認証局を使用します。次の信頼できる認証局を使用するようにアプライアンスを設定できます。

- **プレインストールされたリスト**。アプライアンスには信頼できる認証局のリストがあらかじめインストールされています。これは、システム リストと呼ばれます。
- **ユーザ定義のリスト**。信頼できる認証局のリストをカスタマイズし、アプライアンスにリストをインポートできます。

システムリストまたはカスタマイズされたリストのいずれか、または両方のリストを使って、リモートドメインからの証明書を検証できます。

GUI の [ネットワーク (Network)] > [証明書 (Certificates)] > [認証局の編集 (Edit Certificate Authorities)] ページまたは CLI の `certconfig > certauthority` コマンドを使用してリストします。

[ネットワーク (Network)] > [証明書 (Certificates)] > [認証局の編集 (Edit Certificate Authorities)] ページで、次のタスクを実行できます。

- **認証局のシステムリスト (インストール済み) を参照します**。詳細については、[プレインストールされた認証局リストの参照 \(15 ページ\)](#) を参照してください。
- **システム リストを使用するかどうかを選択します**。システム リストはイネーブルまたはディセーブルにできます。詳細については、[システム認証局リストの無効化 \(15 ページ\)](#) を参照してください。
- **カスタム認証局リストを使用するかどうかを選択します**。カスタムリストを使用して、テキストファイルからリストをインポートするようにアプライアンスをイネーブルにできます。詳細については、[カスタム認証局リストのインポート \(15 ページ\)](#) を参照してください。

- ファイルに、認証局のリストをエクスポートします。テキストファイルに、認証局のシステムリストまたはカスタムリストをエクスポートできます。詳細については、[認証局リストのエクスポート（16 ページ）](#)を参照してください。

プレインストールされた認証局リストの参照

ステップ 1 [ネットワーク (Network)] > [証明書 (Certificates)] ページに移動します。

ステップ 2 [認証局 (Certificate Authorities)] セクションで、[設定を編集 (Edit Settings)] をクリックします。

ステップ 3 [システム認証局を表示 (View System Certificate Authorities)] をクリックします。

システム認証局リストの無効化

プレインストールされたシステム認証局リストはアプライアンスから削除できませんが、イネーブルまたはディセーブルにできます。アプライアンスがリモートホストからの証明書を確認するためにカスタムリストのみを使用することをディセーブルにすることがあります。

ステップ 1 [ネットワーク (Network)] > [証明書 (Certificates)] ページに移動します。

ステップ 2 [認証局 (Certificate Authorities)] セクションで、[設定を編集 (Edit Settings)] をクリックします。

ステップ 3 [システムリスト (System List)] で [ディセーブル (Disable)] をクリックします。

ステップ 4 変更を送信し、保存します。

カスタム認証局リストのインポート

信頼できる認証局のカスタムリストを作成して、アプライアンスにインポートできます。ファイルは PEM 形式にして、アプライアンスで信頼する認証局の証明書が含まれている必要があります。

ステップ 1 [ネットワーク (Network)] > [証明書 (Certificates)] ページに移動します。

ステップ 2 [認証局 (Certificate Authorities)] セクションで、[設定を編集 (Edit Settings)] をクリックします。

ステップ 3 [カスタムリスト (Custom List)] の [有効 (Enable)] をクリックします。

ステップ 4 ローカルマシンまたはネットワークマシンのカスタムリストへのフルパスを入力します。

ステップ 5 変更を送信し、保存します。

認証局リストのエクスポート

システム内の信頼できる認証局のサブセットのみを使用するか、既存のカスタムリストの編集を行う場合、リストを .txt ファイルにエクスポートして、認証局を追加または削除するように編集できます。リストの編集が完了したら、ファイルをカスタムリストとしてアプライアンスにインポートします。

ステップ 1 [ネットワーク (Network)]>[証明書 (Certificates)] ページに移動します。

ステップ 2 [認証局 (Certificate Authorities)] セクションで、[設定を編集 (Edit Settings)] をクリックします。

ステップ 3 [リストのエクスポート (Export List)] をクリックします。

[認証局リストのエクスポート (Export Certificate Authority List)] ページが表示されます。

ステップ 4 自分がエクスポートするリストを選択します。

ステップ 5 リストのファイル名を入力します。

ステップ 6 [エクスポート (Export)] をクリックします。

AsyncOS では、.txt ファイルとしてリストを開くか、または保存するかを確認するダイアログボックスが表示されます。

HTTPS の証明書のイネーブル化

GUI の [ネットワーク (Network)]>[IP インターフェイス (IP Interfaces)] ページまたは CLI の `interfaceconfig` コマンドのいずれかを使用して、IP インターフェイスで HTTPS サービスの証明書をイネーブルにできます。

ステップ 1 [ネットワーク (Network)]>[IP インターフェイス (IP Interfaces)] ページに移動します。

ステップ 2 HTTPS サービスを有効化するインターフェイスを選択します。

ステップ 3 [アプライアンス管理 (Appliance Management)] で、[HTTPS] チェック ボックスをオンにし、ポート番号を入力します。

ステップ 4 変更を送信し、保存します。

次のタスク



-
- (注) アプライアンスにあらかじめインストールされているデモ証明書。テスト目的でデモ証明書で HTTPS サービスをイネーブルにすることはできますが、セキュアではないため、通常の使用には推奨できません。

GUI のシステム設定ウィザードを使用して HTTPS サービスをイネーブルにできます。詳細については、[セットアップおよび設置](#)を参照してください。
